

Il y a Y qui + V 構文の働きについての一考察

——X avoir Y qui + V 構文との比較を通じて——

小 川 彩 子

0. はじめに

「息子が私を待っている」とフランス語でいう場合、次のような言い方が考えられる。

(01) Mon fils m'attend.

(02) Il y a mon fils qui m'attend.

(03) J'ai mon fils qui m'attend. (*Je Reste!*, film de Diane Kurys, 2003)

外国人のフランス語学習者が初級の段階で通常学ぶのは、(01) の〈名詞句 (Y) + 動詞句〉のシンプルな表現であるが、ネイティブは (02) の〈Il y a Y qui ...〉という構文（以下「Il y a Y qui + V 構文」とする）を頻繁に使用する。それは Il y a Y qui + V 構文のどのような働きによるものなのであろうか。また、(03) はある映画の台詞として使われた文であるが、ネイティブはこのような〈X avoir Y qui ...〉という構文（以下「X avoir Y qui + V 構文」とする）も頻繁に用いる。本稿では、Il y a Y qui + V 構文の働きを明らかにするため、X avoir Y qui + V 構文との比較検討を行う。

さて、(02) はいわゆる擬似関係節を伴う Il y a Y qui + V 構文であると思われる。なぜなら、古川 (1984), FURUKAWA (1996) が挙げる以下の擬似関係節の特徴をすべて備えているからである：①先行詞が定名詞句（非後方照応的な場合のみ）、固有名詞、特定不定名詞句である、②先行詞名詞句の指示対象の同定に関係節が関与していない、③Il y a を除いても単独の発話として働きうる（つまり先行詞名詞句と擬似関係節が文的内容を表している）、④主題を

欠く単一判断の文である。

本稿の考察対象は、擬似関係節を伴う Il y a Y qui + V 構文とし、いわゆる制限的關係節および同格的關係節を伴う文は考察の対象としない。

1. Il y a の働き

1.1 先行研究

まず、「Il y a」の働きに関する先行研究を考察する。東郷（1995–1997）は、話し言葉においては、聞き手スペース内に新規の談話指示物を唐突に持ち込むことを避けるために〈il y a + 名詞句〉等の提示構文⁽¹⁾が使われると述べている。(04)はその例である。

(04) on a vu dans les films ya des immeubles qui courent de mauvais côté quoi

ただし、(04)は擬似関係節を伴う Il y a Y qui + V 構文とは考えにくく、いわゆる制限的關係節を伴う存在文であると捉えるのが妥当であろう。よって、東郷 (*ibid.*) が擬似関係節を伴う Il y a Y qui + V 構文における Il y a の働きについて、どのように考えているかは不明である（東郷 (*ibid.*) において、本稿の Il y a Y qui + V 構文に該当する例文は見当たらない）。ただし東郷 (*ibid.*) は「avoir のように意味の希薄な動詞を用いた構文」も前述の「提示構文」にあたるとし、次の例を挙げている。

(05) si vous avez quelqu'un qui pénètre un truc

(05) について東郷は、「si vous avez の部分は動詞 avoir 本来の所有の意味はなく、この文は si quelqu'un pénètre un truc としても意味は変わらない」としており、vous avez と qui を除いても文が成立することを認めている。(05)は序論で述べた擬似関係節の特徴をすべて備えていることから⁽²⁾、擬似関係節を伴う提示構文であると考えられる。実際に東郷も (05) について「主節は単なる新規談話指示物の導入手段にすぎず、意味の重点は従節にある」と述べたうえで「このような特徴のため、この構文はしばしば擬似関係節と呼ばれている」としている。東郷の考え方を応用すると、本稿で扱う Il y a Y qui + V 構

文における Il y a について、次のような考え方が導き出される。

Il y a Y qui + V 構文の主節は単なる新規談話指示物の導入手段であり、文の意味の重点はむしろ従属節にある。発話例 (02) で考えると、«Il y a mon fils» で「私の息子」を導入し、«mon fils qui m'attend» で述定 (prédication) を行っている、つまり Il y a Y qui + V 構文においては、提示機能と述定機能が分離されているという考え方である。

(06) Mon fils qui m'attend.

しかしながら、文脈によっては (06) のような発話も可能であることから、(02) における Il y a は «mon fils qui m'attend» をひとかたまりとして導入しているのではないとも考えられる。

この点について木下 (1978) は (07) を挙げて、Il y a Y qui + V 構文の Il y a は単に〈名詞句 (Y) + qui + 動詞句〉全体を一括して導入・提示する役割を担っていると述べる。

(07) M.-Dis bonjour à l'Artiste pour moi . . .

J. -Eh, l'Artiste, il y a Maria qui te dit bonjour!

木下 (*ibid.*) は、「. . . il y a Maria qui te dit bonjour! では、(話し手は)別に Maria の存在をまず措置しようとしているわけではない」と述べ、Il y a が新規談話指示物を導入するとの考えに異論を唱えている。

また、古川 (1984) は木下 (1978) の考えと同じ方向性を示し、〈名詞句 (Y) + qui + 動詞句〉は統辞的には名詞句であるが、意味的には文的内容を表すと述べる。その論拠として、①〈名詞句 (Y) + qui + 動詞句〉が単独の発話として働きうること (例 (08)), ②〈名詞句 (Y) + qui + 動詞句〉の表現が中性代名詞 «cela, ce, ça» で受けられること (例 (09)) を挙げている。

(08) Tiens! le livre qui est tombé par terre.

(09) La nuit qui tombe, l'hiver, à quatre heures, c'est affreux.

(10) a. Pierre pleure.

b. Pierre, il pleure.

c. (Il y a) Pierre qui pleure.

さらに, FURUKAWA (1996) は Jeanjean (1981) の統計を参照し, 次のように述べている。ネイティブの会話では (10)a. のように主語位置に名詞句を置く表現は, 全体の 2.5% にすぎない。通常は, (10)b. のように名詞句 *Pierre* を文頭に置き, 代名詞で受け直すことで *Pierre* のテーマ化を行うか, (10)c. のように擬似関係節を用いることで脱テーマ化を行い, *Pierre* についてではなく〈*Pierre pleure.*〉という事態を表す手法を用いるとのことである。

1.2 Il y a の働きに関する本稿の立場

Il y a の働きについて, 本稿では前節で紹介した木下 (1978), 古川 (1984) および FURUKAWA (1996) の考え方に立脚し, Il y a Y qui + V 構文の Il y a は, 文的内容を表す〈名詞句 (Y) + qui + 動詞句〉を一括して導入していると考ええる。そもそも擬似関係節の文とは, テーマのない単一判断 (「～が…だ」) の文である。そうであるにもかかわらず, «Il y a Pierre» で *Pierre* を導入し, «*Pierre qui pleure*» で *Pierre* について述定 (prédication) すると分析することは, 文の二重判断 (「～は…だ」) に繋がってしまうと考えられるからである。よって, Il y a Y qui + V 構文を使用する話し手は, Y について語ろうとしているのではなく, Y についてのある事態について語ろうとしていると考えることができる。

さて, (10)c. をみると «Il y a» が無くとも脱テーマ化が行われることに変わりはなく, また文の成立に影響がないことがわかる。では, ネイティブはどのようなときに Il y a Y qui + V 構文を使用する傾向があるのだろうか。再び序論の発話例を使って検討する。

(11) Il y a mon fils qui m'attend. (= (02))

(12) Mon fils qui m'attend. (= (06))

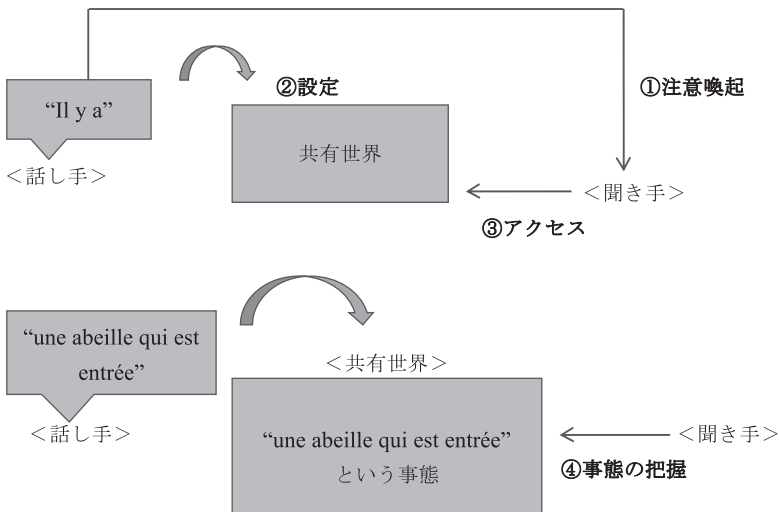
(11) と (12) では, どのような意味の違いがあるのだろうか。インフォーマント⁽³⁾によると, (12) の発話状況としては次のようなものが考えられる。話し手は息子を幼稚園に迎えに行くことになっていたが, うっかり近所の人と話し込んでしまった。ハッと時計を見て, «Ah! Mon fils qui m'attend!» 「あ,

息子が私を待っているんだった」と独り言をつぶやく場面などである⁽⁴⁾。これに対し (11) は、聞き手がいる場合に使われる表現である。たとえば同様の状況で、話し手が幼稚園に向かう途中でお茶に誘われ、これを断る理由として発話することが考えられる。この場合、話し手は「息子は、私を待っている」と息子について語るのではなく、「息子が私を待っているという事態」について述べているのである。つまり、第三者に関するある事態を聞き手との共有世界に導入する場合に Il y a が使用されると考えられる。別の例を検討しよう。

(13) a. Ah! Une abeille qui est entrée!

b. Attention! Il y a une abeille qui est entrée!

(13)a. は、話し手がミツバチの存在を認知し、「あ、ミツバチが入ってきた!」と独り言をつぶやく場面である。他方 (13)b. は、話し手が「ミツバチが入ってきた」という事態を聞き手に伝え、注意を喚起しようとしている場面である。つまり、ある事物に関するある事態を、聞き手との共有世界に導入する場面であるといえる。そして聞き手は、共有世界にアクセスすることで、導入された事態についての情報を得る。以上より、Il y a の働きには、以下の2つがあると考えられる。(i)「これから第三者または事物についてのある事態



を伝えますよ」と聞き手の注意を引く働き（図①），（ii）聞き手がアクセス可能な「共有世界」を設定する働き（図②）である。この Il y a が発話されることにより，聞き手は「共有世界」にアクセスし（図③），事態を把握するのである（図④）。

ところで，Il y a Y qui + V 構文の働きを明らかにするためには，（14）のように人称代名詞を主語にとる X avoir Y qui + V 構文との比較検討を行うことが有用である。

（14）J'ai mon fils qui m'attend. (= (03))

2章では，まず動詞 avoir についての考察を行い，続いて Il y a Y qui + V 構文と X avoir Y qui + V 構文の比較検討を行う。

2. X avoir Y qui + V 構文と動詞 avoir

2.1 動詞 avoir の働き

Benveniste（1966, pp.198–199）は，avoir を用いる話し手は，対象に影響を受けた主体の状態について主に語っていると説明する。

（15）J'ai un fils malade.

例えば（15）のような発話がこれに該当する。話し手は «un fils malade» について語っているのではなく，«un fils malade» の存在に影響を受けた主体 «Je» について語っていることになる。さらに，Benveniste (*ibid.*) は，avoir によって結ばれる主体と対象の間には外在的・非本質的な (*extrinsèque*) 関係しかなく，言い換えれば「所有者 (*possesseur*)」と「所有物 (*possédé*)」の関係があるに留まると述べる。

（16）J'ai un livre.

話し手が（16）のように発話した場合，聞き手は «ai» の存在によって «un livre» の所有者が «Je» であることが分かるのであるが，聞き手は，「私が所有しているのは本だ」と話し手が「本」について語っているとは理解しない。avoir を用いた話し手は，主に主体について話す意図を有していることから，話し手

は「本の所有者であるところの私」について語っていると聞き手は理解するのである。

以上より、X avoir Y qui + V 構文を使用する話し手は、〈名詞句 (Y) + qui + 動詞句〉が表す事態に影響を受けたところの X について語っていると仮説を立てることができる。次節で、この仮説の妥当性を具体的な発話例を使用し検証する。

2.2 X avoir Y qui + V 構文

本節では Il y a Y qui + V 構文を使用した発話例と、その発話例を X avoir Y qui + V 構文に言い換えた文とを比較して分析する。両構文間にどのような意味の違いがあるかを考察することで、前節の仮説の妥当性を検証すると共に、両構文の働きの差異を解明する。考察の順序として、まず Y に定名詞句が置かれている場合、次に不定名詞句が置かれている場合をみていく。なお、発話例 (17) から (20) の a はすべて実例であり、b は a に変更を加えたものであるが、b は文法的に問題のない文であることはインフォーマントに確認済みである。

〈Y が定名詞句の発話例〉

- (17) (とても良いことがあり、宙を舞うような幸福な気持ちで歩いていた話し手は、ふと胸に付けていたブローチがないことに気付く。次の瞬間「ガシャン」という音がして、話し手の目の前で、自転車から落ちて尻もちをついている子供たちが映し出される。この子供たちは話し手が落としたブローチが原因で転んだと思われるが、話し手は落としたブローチをいじりながら、子供たちの母親に次のように言う)

a. Samantha! il y a tes enfants qui sont tombés.

(*Odette Toulemonde*, film d'Eric-Emmanuel Schmitt, 2006)

b. Samantha! j'ai tes enfants qui sont tombés.

- (18) (ある少女が、父が経営する精神病院から脱走した若い男性患者を納

屋に匿い、食べ物を与え)

- a. Assieds-toi. Je t'ai apporté à manger. Là, je ne peux pas rester, il y a mes parents qui vont arriver.

(*Je m'appelle Elisabeth*, film de Jean-Pierre Améris, 2006)

- b. Assieds-toi. Je t'ai apporté à manger. Là, je ne peux pas rester, j'ai mes parents qui vont arriver.

〈Y が不定名詞句の場合〉

- (19) (カフェに入ってきた客がウェイトレスに)

- a. Il y a une dame qui vous attend devant le taxi.

(*Fauteuils d'orchestre*, film de Daniel Thompson, 2008)

- b. J'ai une dame qui vous attend devant le taxi.

- (20) (義足を装着している女性が「義足を付けていると、こんな面白いことがあるのよ」と切り出し)

- a. L'autre jour, dans Grenoble, y a un type qui m'a suivie pendant je sais combien de temps, je changeais de direction, je prenais les passages piétonniers, finalement il m'a abordée. . . j'ai mis dix minutes à m'en dépêtrer : c'était un fétichiste.

(*La femme d'à côté*, film de François Truffaut, 1981)

- b. L'autre jour, dans Grenoble, j'ai un type qui m'a suivie pendant je sais combien de temps, je changeais de direction, je prenais les passages piétonniers, finalement il m'a abordée. . . j'ai mis dix minutes à m'en dépêtrer : c'était un fétichiste.

まず Y に定名詞句が置かれている場合であるが、インフォーマントによると、(17)a. はサマンタの子供たちが話し手の目の前で転んでいるという事態が伝えられているのに対し、(17)b. では、サマンタの子供たちが転んだのは話し手の責任であるというような、話し手の困惑した様子が伝わってくるということである。これは、話し手がこの事態との関わりをもち、影響を受けているこ

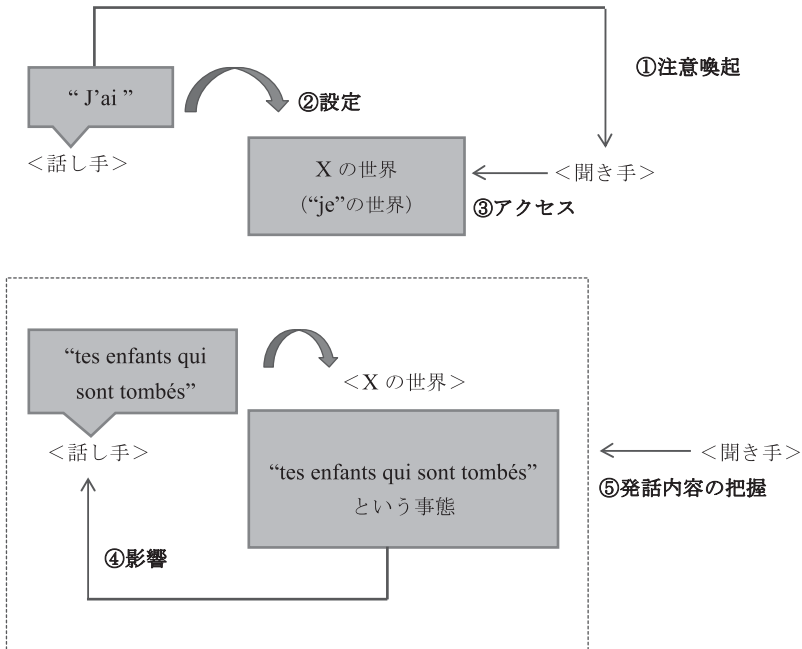
とを表している。この映画では、話し手は子供たちが転んだのは自分が落としたブローチが原因だとは思っていないので、客観的な事態を表す (17)a. が使用されていると考えられる。次に (18)a. では、両親がやって来るという事態が伝えられているが、(18)b. では、「(両親がやって来るから) 両親のところへ行かなければならない」というような、話し手の困った様子および義務感が伝わる。これについても、この事態の影響を受けた話し手の様子が表現されているといえよう。

次に Y に不定名詞句が置かれている場合について考察する。(19)a. は「タクシーの前で、ご婦人があなたをお待ちですよ」という事態を表している。これに対し (19)b. は、例えばホテルのベルボーイである «je» が «une dame» に伝言を頼まれた場合などに使用可能である。ベルボーイはこの事態に影響を受け、「あなた(聞き手)に早く (une dame のことを) お伝えしなければ」という責任を感じているような表現効果が生じるのである。次に (20)a. は、「ある男が私を付け回した」という事態を表しているのに対し、(20)b. では、話し手はこの事態を自分に関係づけて語ることになり、話し手がこの事態と関わったことを自慢に思っている気持ちが表現されうる。映画では、話し手は「義足を付けていると、こんな面白いことがあるのよ」と話を切り出し、事態に影響を受けた自分について語っていると解釈されうる (20)b. ではなく、この事態を自分に関係づけることなく客観的に述べている (20)a. の表現が用いられている。

以上より、X avoir Y qui + V 構文を使用する話し手は、〈名詞句 (Y) + qui + 動詞句〉が表す事態に影響を受けたところの X について語っているという仮説は妥当といえよう。

ここで、両構文の働きの差異を分析する。(17) を例にとると、a. の場合は前述のように、話し手が «Il y a» と発話することで、聞き手に対し「これから第三者または事物について、ある事態が述べられる」と注意を促すと同時に、聞き手もアクセス可能な共有世界が設定されることになる。つまり Il y a Y qui + V 構文ではニュートラルな「共有世界」においてある事態が語られるので

あって、誰か特定の人物がその事態の影響を受けているということは伝わらない。これに対し (17)b. では、話し手が «J'ai» と発話することで、聞き手に対しこれから X について語ろうとしていることが伝わり (図①)、これと同時に話し手は X の世界 («je» の世界) を設定しているのである (図②)。そして聞き手は X の世界にアクセスし (図③)、X の世界に «tes enfants qui sont tombés» という事態が入ることにより、この事態に影響を受けている X について (図④) 話し手は語っているのだと聞き手は解釈するのである (図⑤)。



言い換えれば、〈名詞句 (Y) + qui + 動詞句〉が表すある事態の主体が第三者または事物である場合において、話し手がこの事態に影響を受けた自分 (X) について語る意図を有しておらず、その事態のみを聞き手に伝えたい場合、会話のストラテジーとして聞き手が情報にアクセスしやすいように Il y a Y qui + V 構文を用いるのだと考えることができる。

3. おわりに

本稿では、話し言葉で頻繁に使用される Il y a Y qui + V 構文の働きを、X avoir Y qui + V 構文との比較を通じて考察し、以下のことを明らかにした。①話し手が「Il y a」と発話することで、聞き手に対し「第三者または事物について、ある事態が述べられる」と注意を促すと同時に、聞き手もアクセス可能な「共有世界」が設定される。②Il y a Y qui + V 構文ではニュートラルな「共有世界」において、ある事態が語られるのであって、誰か特定の人物がその事態によって影響を受けているということは伝わらない。③これに対し、X avoir Y qui + V 構文では、話し手がこの構文を使用するときには、Xの世界に〈名詞句(Y) + qui + 動詞句〉が表す事態が入ることにより、この事態に影響を受けたXについて語る意図を有しているといえる。

ところで、Il y a Y qui + V 構文には他にも様々な種類がある。X avoir Y qui + V 構文との比較検討をさらに詳細に行うことで、各々がどのような内容に対応しているかの解明をめざすとともに、X が二人称・三人称の場合に生じる表現効果等を検討していきたい。

注

- (1) 東郷（1995–1997）によれば、提示構文とはその述語が新しい指示対象を談話に導入することをもつばらの機能としている文のことである。典型的なものは存在文であるが、それ以外にも c'est NP 構文の一部や、avoir のように意味の希薄な動詞を用いた構文がこれに含まれるとする。
- (2) 序論で紹介した古川（1984）、FURUKAWA（1996）が挙げる擬似関係節の特徴は、Il y a Y qui + V 構文との関係で定義されている。これを X avoir Y qui + V 構文に応用すると、特徴③は「X avoir を除いても単独の発話として働きうる（つまり先行詞名詞句と擬似関係節が文的内容を表している）」と解釈される。発話例（05）は X avoir Y qui + V 構文であることから、ここでは特徴③を「Vous avez を除いても単独の発話として働きうる」と解釈している。
- (3) インフォーマントは 60 代のフランス人男性である。
- (4) または、聞き手に伝わることを意識し、あたかも独り言であるかのように発話さ

れる場合もある。

参考文献

- 小田涼 (2012) 『認知と指示－定冠詞の意味論』 京都大学学術出版会, 216–225.
- 金子真 (2003) 「擬似関係節と喚体句」『フランス語学研究』 37, 48–53.
- 木下光一 (1978) 「フランス語の非人称ヴァリエントと発話の意味構造」『フランス語学研究』 12, 1–16.
- 津田洋子 (2012) 「現象描写文としての Il Y A 名詞句 + 関係節 Il Y A syntagme nominal + proposition relative comme phrase événementielle dénotant la perception」『フランス語学研究』 46, 19–34.
- 東郷雄二 (1995–1997) 「フランス語の話し言葉の特徴－談話方略を中心に」(「話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究」基盤研究 C 研究代表者 東郷雄二), 12–33.
- 東郷雄二 (1997) 「会話フランス語のストラテジー－談話への名詞句の導入をめぐって」『フランス語学研究』 フランス語学会, 31, 15–26.
- 東郷雄二 (2006–2008) 「フランス語の存在文と探索領域－意味解釈の文脈依存性と談話モデル－」(「会話フランス語コーパスによる談話構築・理解に関する意味論的研究」基盤研究 C 研究代表者 東郷雄二)
- 東郷雄二 (2012) 「存在文と不定名詞句の意味解釈」『フランス語学の最前線 1』 ひつじ書房, 53–77.
- 春木仁孝 (2001) 「フランス語の発想 日本語の発想⑥」『ふらんす 9 月号』 白水社, 4–9.
- 春木仁孝 (2001) 「フランス語の発想 日本語の発想⑦」『ふらんす 10 月号』 白水社, 4–9.
- 藤田康子 (1996) 「il y a と avoir 語用論分析の試み」『年報フランス研究』 関西学院大学フランス文学会, 30, 390–401.
- 藤田康子 (1997) 「avoir と il y a」『年報フランス研究』 関西学院大学フランス文学会, 31, 107–119.
- 古川直世 (1984) 「フランス語における擬似関係節について」『文藝言語研究 言語篇』 筑波大学文芸・言語学系, 9, 109–134.
- 古川直世 (1996) 「Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra 型構文について」『フランス語学研究』 30, 34–39.
- BENVENISTE, E. (1966), *Problèmes de linguistique générale, I*, 16. «Être» et «Avoir» dans leurs fonctions linguistiques, Gallimard.
- FURUKAWA, N. (1996), *Grammaire de la prédication seconde*, Duculot, Louvain-la -Neuve.
- KAYNE, R. (1975), *French Syntax: the transformational cycle*, MIT Press, Cambridge,

Mass.

KAWAGUCHI, J. (1991), *Avoir et les problèmes de la localisation en français*, France Tosyo.

ROTHENBERG, M. (1971), "Les propositions relatives à antécédent explicite introduites par des présentatifs", *Etudes de linguistique appliquée* 2, 102-117.

(文学研究科博士課程後期課程)